

編集委員リレー執筆コーナー

中村 優一

NAKAMURA Yuuichi

本誌編集委員



若手機電職員

はじめまして、新任編集委員の中村優一と申します。建設業に従事しております。よろしくお願いいたします。

先日建設業関係の機電技術者意見交換会があり、最後にグループ別発表会が行われましたので、その時の状況を私見を交えながら報告させていただきます。

今年は27名が参加し2日掛かりでグループ編成からグループ討議、そしてグループ発表と進みました。原則は10年前後の若手機電職員となっていますが、今年は20年生まで参加しており、流石に発表の仕方も大人びておりました。今年で14回目になりますが、他社の同じ職種の人達と意見交換という形で深く接する機会は殆どありませんので、日頃感じていることを伝え合う良い機会になっています。とくに今年はここまで言うかというほどの活発さがありました。5グループに分かれての発表でしたが“建設業のイメージアップ”と“機電職員の地位の向上”は共通した見解で、イメージに関しては4Kが発表され、きつい・汚い・危険までは普通に聞いていたのですが、4つめの怖いには吹き出してしまいました。また、犯罪者に土木作業員Aの形容が多いことがあげられ、真実以上に悪人が多いイメージを与えていると嘆いていました。

テーマは「ものづくりの楽しさ」でしたので、どうしたらものづくりの楽しさを感じられるか、ものづくりの楽しさを伝えるにはどのようにした

らよいかで始まり、一つしかないものを造る過程と造り上げたときの喜び、自分たちで開発した工法でやり遂げた時の喜び、更にそれを誰に伝えるか、技術の継承も含めて次世代の機電職員に伝えたいがゼネコンへの機電職員の就職希望者が少ない、社会に貢献しているのを伝えたいが方策が見当たらないなどの憂いになっていました。機電職員に特化した内容も多く、機電職は適正に評価されていない、組織が小さく存在感が薄い、相談する先輩が少ない、便利屋・雑用係といった思いを抱いている人が結構いたようですが、その殆どがある程度年数を経て仕事を習得し自立感を持ち始めた時から感じ出したようでした。その他ざっくりばらんに申し上げると一部の意見ではありますが、“世間に建設業の素晴らしさをアピールしたいが身内がまともでないのにそんなことまで出来ない”、コミュニケーションが取れない上司の増加、やる気のない所長がいる、自己満足できる仕事を与えて欲しい等愚痴めいたこともかなりありました。しかし、根底には建設業の行方を思いやる内容となっていました。建設業の果たす役割、建設業の優秀な技術、社会に貢献する姿勢、環境への配慮等を真剣に考えていました。

私も終わった後の講評担当の一人でしたが、「月刊機電屋」というものを発刊して建設業の機電屋をアピールしようという意見がありましたので、ある機関紙に機電職員コーナーを提案してみる約束をしました。

我々の若い頃と現在の状況とで最も違うことは、やはり仕事の量です。若手職員の隔々までが建設業の現況を認識し、景気さえ上向けば優秀な人材が建設業に入ってくる筈、それが建設業のレベルアップに繋がると訴えていました。若手には伸び伸びと仕事をしていただきたい、この若手の真摯な発表状況を経営者とお役所の皆さんに是非ご覧になっていただきたいと強く感じた次第であります。